

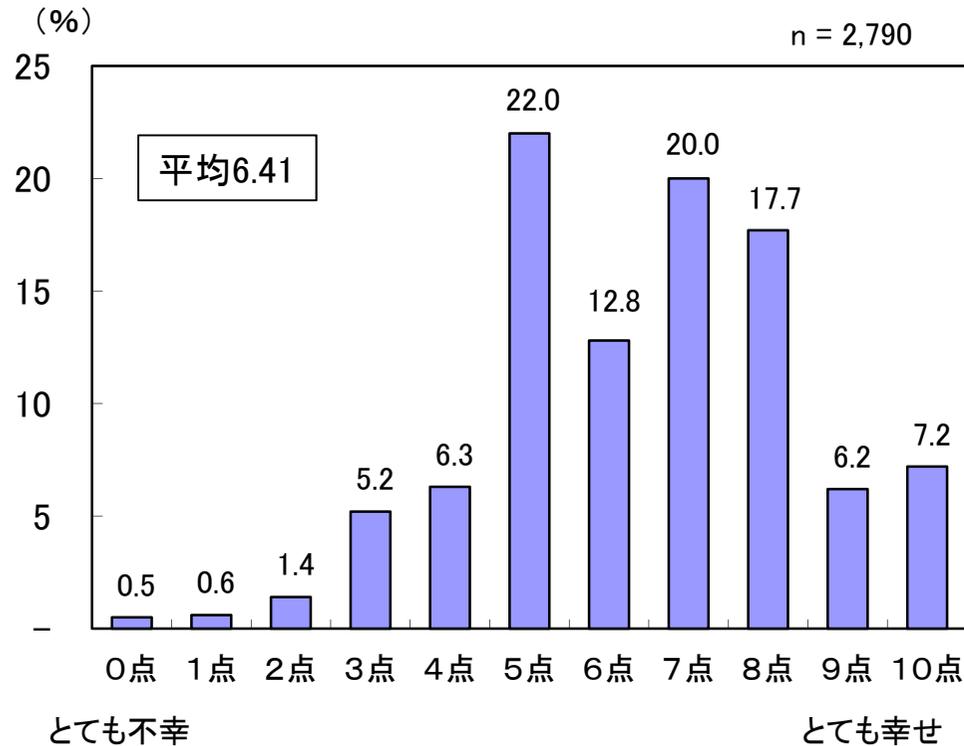
# 人々の幸福感と所得について (中長期、マクロ的観点からの分析②)

平成26年2月14日  
内閣府

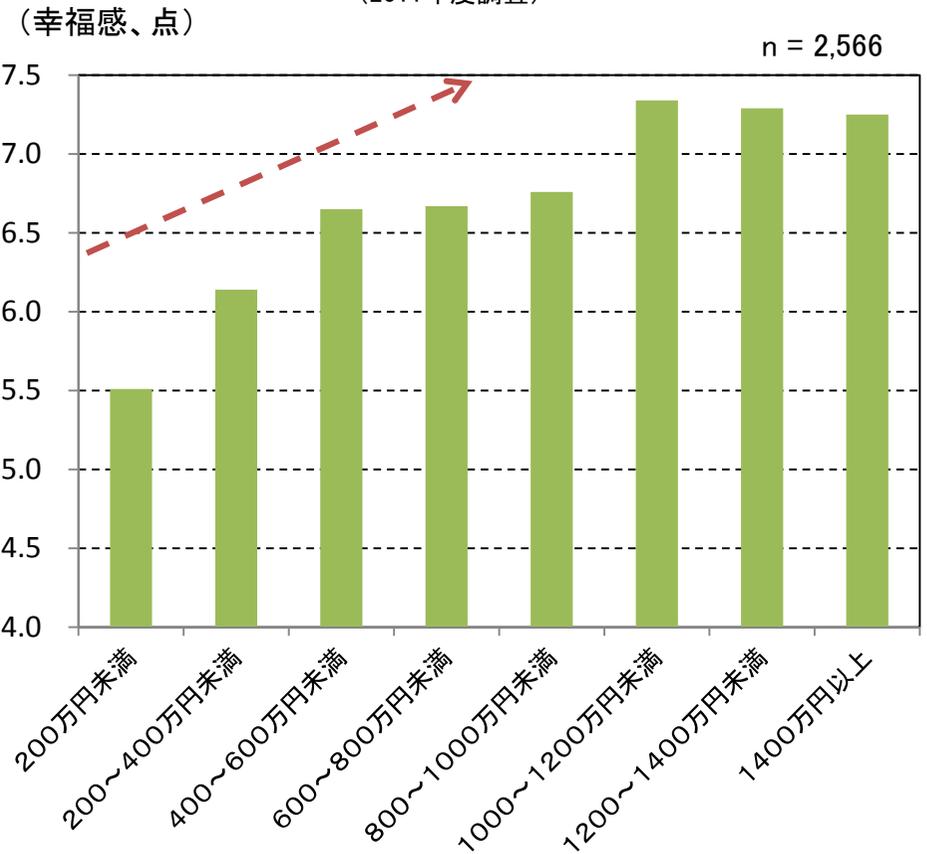
# 1. 幸福感と所得

- 幸福感の分布は、中位の割合が高い。
- 世帯年収が高いほど、幸福感が高くなる傾向。

幸福感の分布  
(2011年度調査)



世帯年収と幸福感  
(2011年度調査)

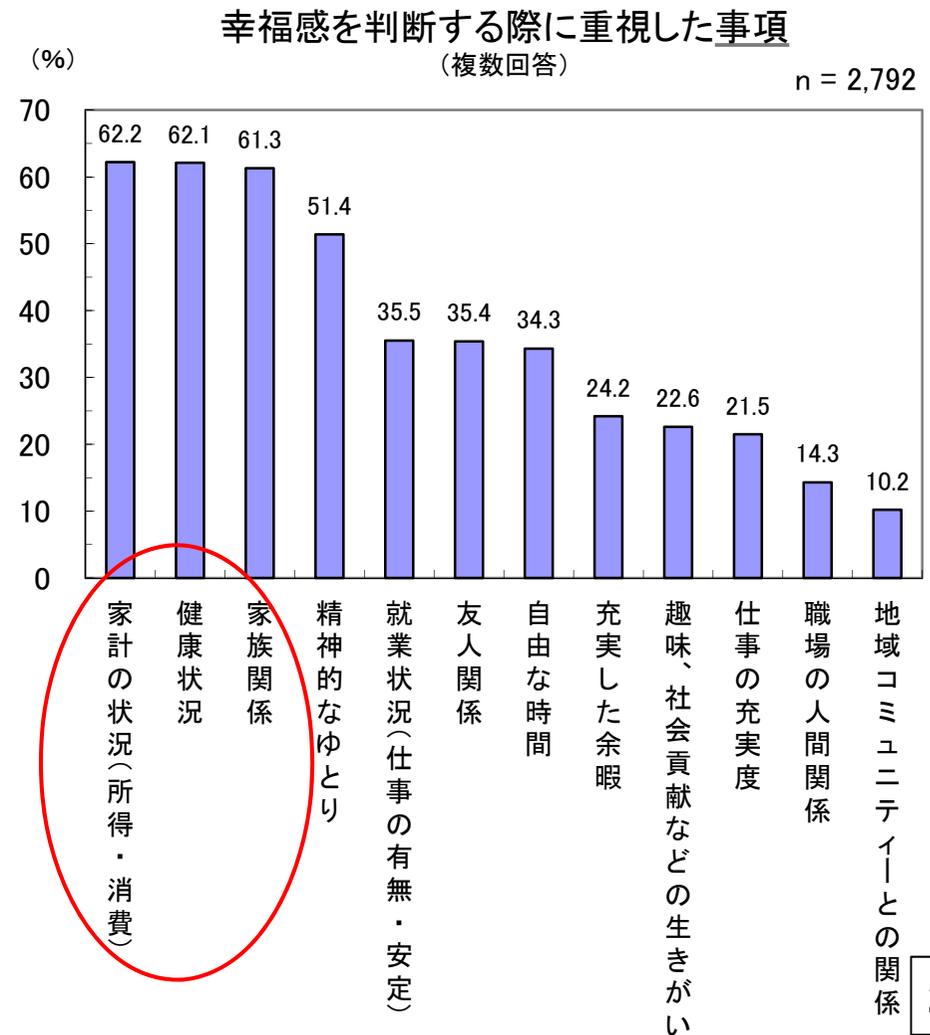
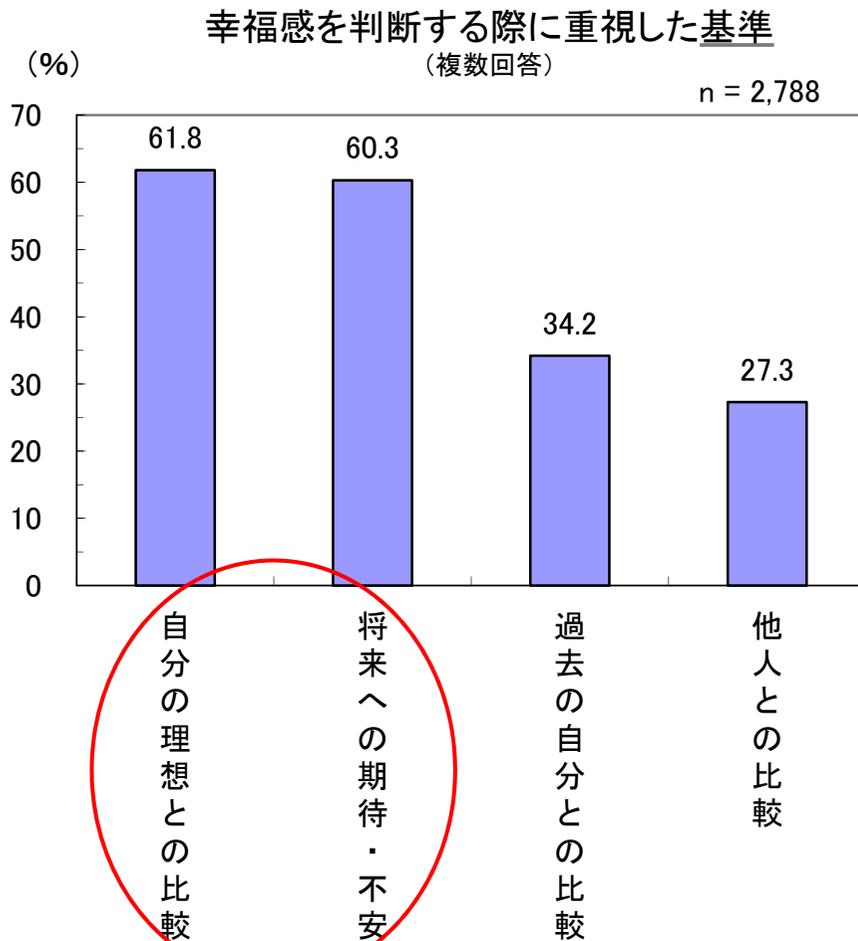


(備考) 内閣府「平成23年度国民生活選好度調査」をもとに作成。

(注) 幸福感についての質問:「現在、あなたはどの程度幸せですか。『とても幸せ』を10点、『とても不幸』を0点とすると、何点くらいになると思いますか。」

## 2. 幸福感の判断材料

- 幸福感を判断する際に重視する基準としては、自分の理想との比較や将来への期待・不安が挙げられる。
- 幸福感を判断する際に重視する事項としては、主に、所得や消費といった家計の状況や健康状況、家族関係が挙げられる。

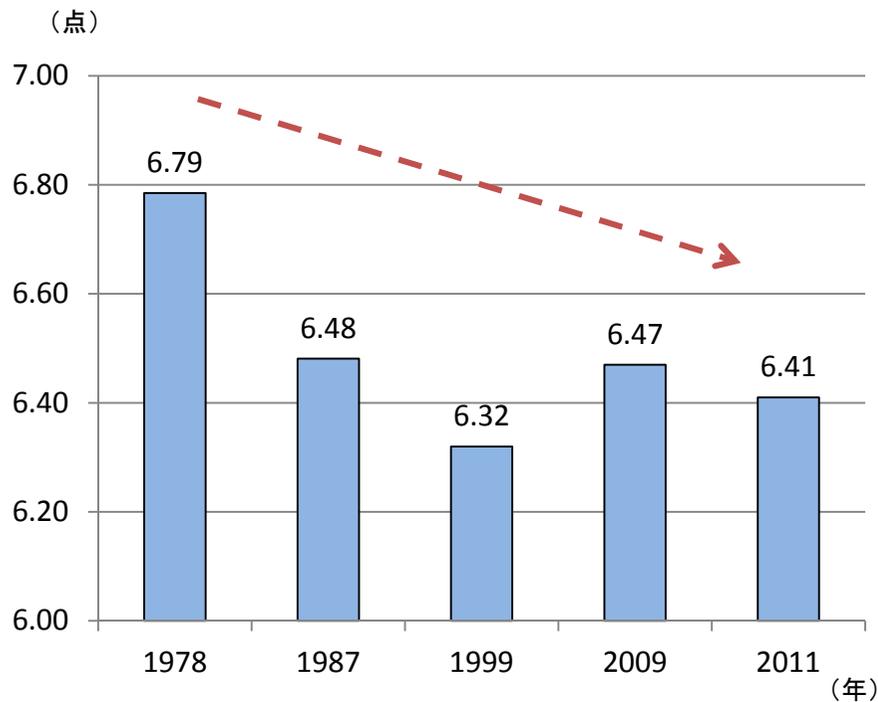


(備考)内閣府「平成23年度国民生活選好度調査」をもとに作成。

### 3. 幸福感と暮らし向きの変化

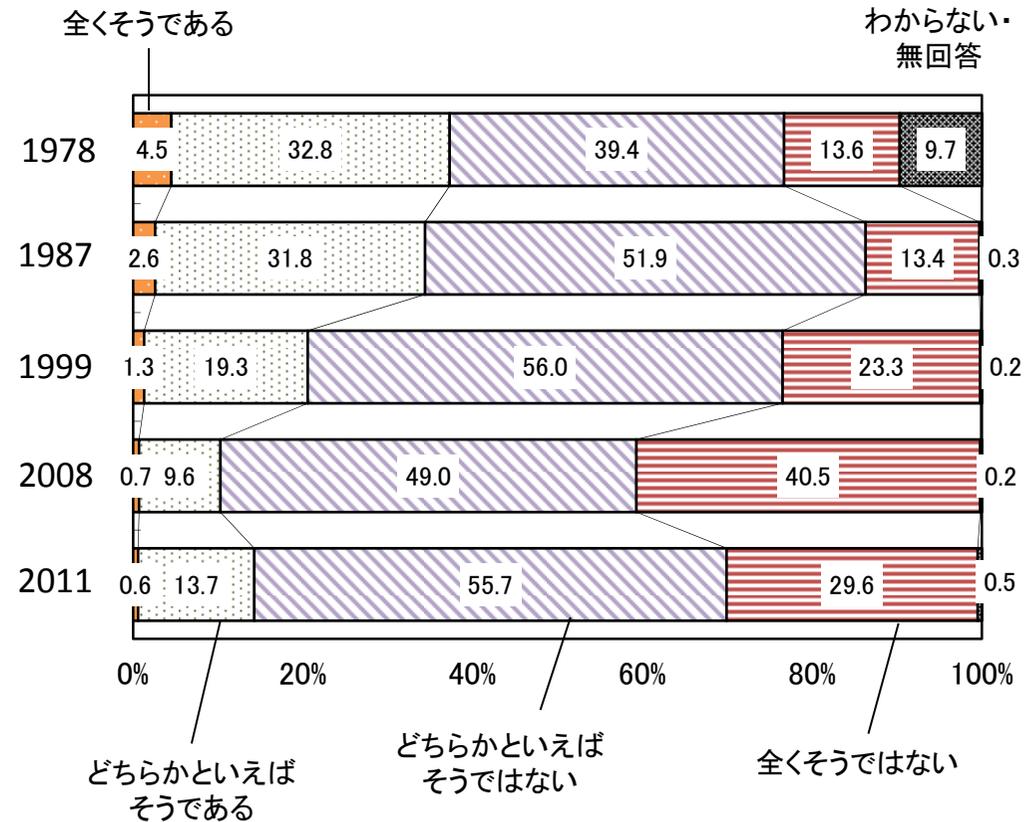
- 幸福感は、1970年代に比べると低下。
- 暮らしが良い方向に向かっていると感じる人の割合は、減少傾向。

幸福感の推移



(備考)内閣府「国民生活選好度調査」をもとに作成。  
本調査は、1978年度以降3年ごとに、国民の意識とニーズに関する時系列調査を行っているが、2002年～2008年には幸福感の調査は行われていない。

暮らし向きについての見通し  
(よい方向に向かっているか)

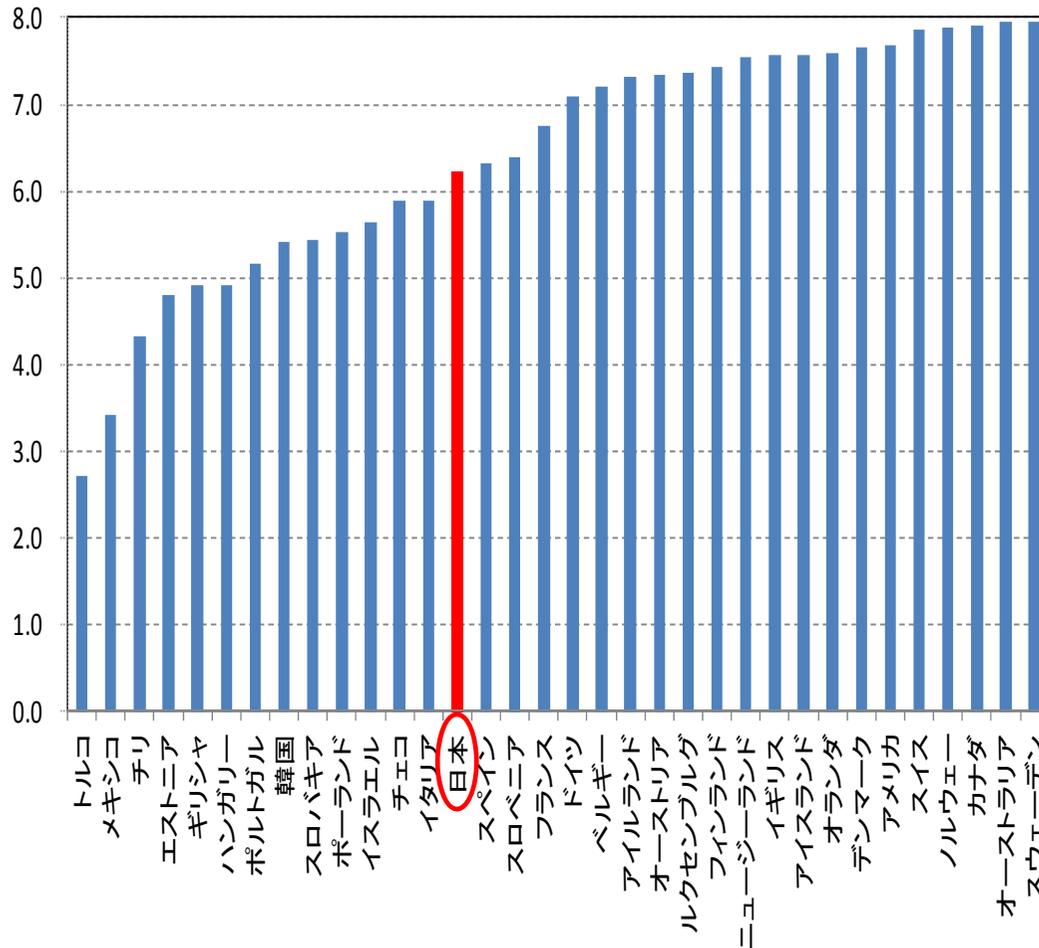


(備考)内閣府「平成23年度国民生活選好度調査」をもとに作成。  
(注)暮らし向きの見通しについての質問:  
「世の中は次第に暮らしよい方向にむかっているか。」

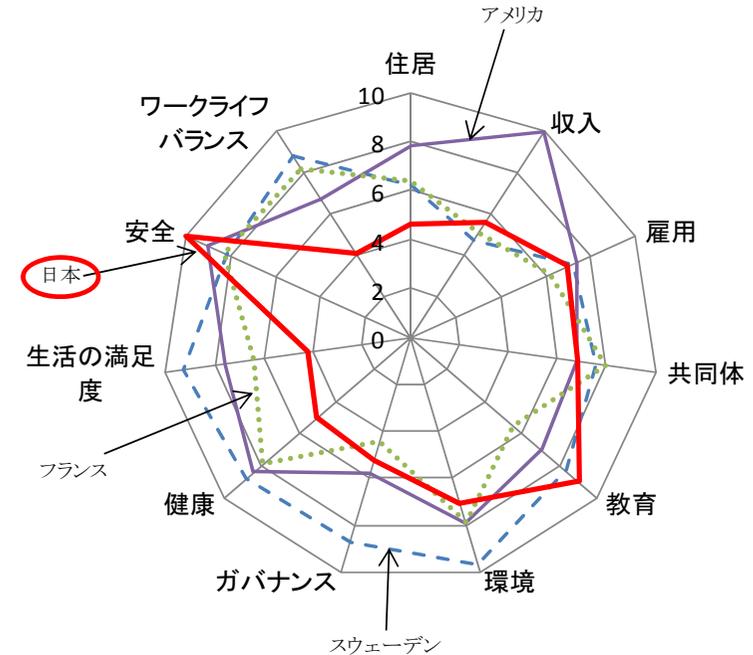
# 4. 「生活の質」の国際比較

□ 日本の「生活の質」は、OECD加盟国でやや低位。構成要素である「安全」や「教育」は高いが、「ワークライフバランス」や「生活の満足度」、「住居」は低い。

Better Life Indexの国際比較



Better Life Indexの構成要素



- 【構成要素の基となるデータ】
- 住居：一部屋当たり人数、家に水洗トイレが無い人の割合、住居費
  - 収入：家計可処分所得、家計金融資産
  - 雇用：就業率、長期(1年以上)失業率、年間賃金、雇用の安定性(雇用期間が6ヶ月以下の雇用者の割合)
  - 共同体：「困った時に頼れる親戚、友人がいる」と回答した人の割合
  - 教育：高校修了者の割合、15歳児の学力
  - 環境：大気汚染(PM10)、水質
  - ガバナンス：立法過程の透明性、投票率
  - 健康：平均寿命、自分の健康状態が「良い」、「大変良い」と回答した人の割合
  - 生活の満足度：生活の満足度の自己評価
  - 安全：人口当たりの殺人件数、過去12ヶ月に犯罪に巻き込まれた人の割合
  - ワークライフバランス：長時間(週50時間以上)勤務者の割合、余暇や個人的活動(睡眠、食事)に充てた時間

(備考) OECD “Better Life Index” HPをもとに作成。

(注) Better Life Indexは、「住宅」、「収入」、「雇用」、「共同体」、「教育」、「環境」、「ガバナンス」、「健康」、「生活の満足度」、「安全」、「ワークライフバランス」という11の構成要素で計測されるもの。